昭和文学全集

19

中里恒子
芝木好子
大原富枝
河野多恵子
大庭みな子

小学館

昭和文学全集

19

中里恒子

芝木好子

大原富枝

河野多惠子

大庭みな子

小学館

昭和文学全集
第19巻

昭和六二年一二月一日　初版第一刷発行

著者——中里恒子　芝木好子　大原富枝
河野多恵子　大庭みな子

発行者——相賀徹夫
発行所——小学館
〒一〇一 東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号
振替 東京八—一〇〇番
電話 編集・〇三—二二三—九二一—四三五一
業務・〇三—二二三—三〇—五三二二
販売・〇三—二二三—三〇—五七三九

印刷——凸版印刷株式会社
製本——凸版印刷株式会社
若林製本工場
用紙——三菱製紙株式会社
著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568019-9
© KEI A. SCRIBNER YOSHIKO SHIBAKI TOMIE OHARA
TAEKO KONO MINAKO OBA 1987

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

中里恒子　5

乗合馬車　7
日光室　30
墓地の春　42
此の世　55
隠れ蓑　65
裾野　77
歌枕　89
わが庵　101
朧草子　109
誰袖草　131

百万　175
家の中　187
飛鳥　197

芝木好子　205

青果の市　207
湯葉　228
青磁砧　268
隅田川暮色　306

大原富枝　407
409　ストマイつんぼ—第七感界の囚人—
427　婉という女
487　鬼のくに
502　於雪—土佐一条家の崩壊—

河野多惠子　589
591　幼児狩り
604　蟹
621　回転扉
761　骨の肉
771　砂の檻

大庭みな子　787
789　三匹の蟹
809　青い狐
815　オレゴン夢十夜
900　鳩
910　どんぐり
922　寂兮寥兮

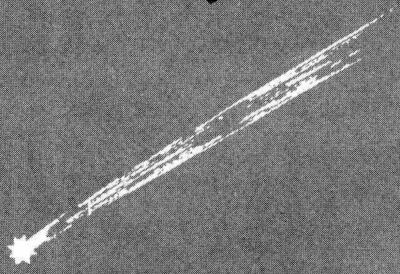
973　作家アルバム

解説
981　中里恒子……阿部昭
987　芝木好子……桶谷秀昭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

993　大原富枝……大原富枝
999　河野多惠子……川村二郎
1005　大庭みな子……大庭みな子
年譜
1011　中里恒子……岡宣子
1016　芝木好子……芝木好子
1021　大原富枝……大原富枝
1026　河野多惠子……河野多惠子
1031　大庭みな子……大庭みな子
1036　底本について
1038　用字用語について

中里恒子



乗合馬車

きょうも、きのうもずっとこの頃は朝から風立っていた。

目覚めたままのまだよごれない頭でみつめあう朝のひととき、煖炉のそばで、長年し馴れた夫妻かけ向いの静かな食事が済むと、いつものように、森之助もアデリヤもそれぞれの新聞を忙し気に読みあさり始める。

硝子戸のそとには、弱弱しい、しかし新鮮な朝の光線が散らばって、そのために一層寒さをはっきりさせているようである。

「今日はお前の日だ、」

居間に続いた暖かい廊下でワイシャツをつけながら、森之助が話しかけた。

「ほんとに、その日がきてしまったんですよ、」

アデリヤも部屋着の裾をつまみあげて、訴えるような眼眸で椅子を立ってきた。

「お母さんから祝電はまだかい、」

「一番それをあたしが待っているのにねえ……でもママンは、クリスマス休暇をたのしむために、サンジェルマンの田舎家へ行ってるんですって……ああ、あそこの綺麗な森の中で暮してるんですって、」

「また巴里風が吹いてる――」

「もっともっとですよ、その上に、きょうからは仕事風があたしを吹きとばしてしまう、」

森之助はさっさと着換を終ると、

「……帰りに店へ寄るよ！」

「お店は五時半までですから、そして、あたしは店のあるじなんですからねえ……おかしいようだけれど、だってそうなのだわ、」

今日から、自分が帽子店の主の役をするということが、ちょっと不思議なような、久しく考えていた夢が、自分をここまで連れてきてしまったことが、ちょっと不安なような、それらの感情は、せつなくアデリヤを囲んでいる。そのために、少しアデリヤはぼんやり見えるほどだ。

森之助の出勤を送って、アデリヤは玄関へ出てきて、

「いいお日さま、綺麗ね……おやっ、」

まだ磨かれない靴や、落葉の吹き溜った庭さきに、急に鋭い眼をとめ、

「だめ、だめ、お掃除どうしてまだ？　きたない厭あね、あたしまできたない……」

さもきたなそうに眉をしかめた表情を、棒立ちになっている菊代にみせるのである。それからやがて美しそうな顔つきに返って、

「お花きれい、お掃除きれい、ああみんな綺麗ね、あたしもきれい……」

こう云って、菊代を叱った。

ちょっと気のながそうな、凝った叱り方をするけれど、仲仲アデリヤ自身は、癇癖の方なのである。ただ、沢山の日本語を使いこなせず、大抵の事柄は、きれいときたないに分けて、始末する習慣からきている。

どっちかと云えば、西洋人に似合わぬ綺麗好きの性分で、人間でも、感情でも、金銭でも、遊びごとでも、みんな綺麗な部へ収めたくって、――だから、お天気の悪い日は、きたない。ラグビイでも野球でも贔屓方が負け

ると、おおきたない駄目。また、手提の中に金銭の乏しいときも、あたしきたない。それから良人の森之助が、よその婦人に気をとめたりすると、これは特別「きたない、きたない、」とけなす。

綺麗というのは凡てこの反対の、アデリヤの気に入った状態を指すのである。

まだ、こういうアデリヤの気性がのみこめないので、菊代は絶えず不安そうに、その冷めたいほどの大きな眼を翳らせていた。

三度の食事だって、家の中だって、あの湿っぽい、黄昏れのような「すみれ孤児院」の寝床よりどれほど上等でしあわせかしれないのに、ただそれらだけでは、菊代を嬉しがらせてはいないようである。菊代自身でさえ、今の自分を、昔よりしあわせだと思えないことが不安で仕方ない、こんな上等な寝床を。……

成長期の肉体や精神を、固くはばんでいたかのような様様の「すみれ」の戒律や訓練が、菊代の皮膚に残っていて、明るい、美しい、らくな町の中の生活をふさがせているのかもしれぬ。

暗くてもみすぼらしくても、働き通しでも、戒められ通しでも、なんだか孤児院の寝床の方が暮しよかった——そんな気がして、黒衣のマダムの豊かな裾襞へ、飛んで帰って、あたたまってみたいと思う。

「菊代さん、こんど動物園へ連れてってあげましょうね、動物園のお猿だって、あんたより自信がありそうに暮しているわ、」

すっかりもう、御主人夫妻の勘どころをつかんで仕えている梅やは、叱られてもほめられても、それが解らぬ白痴のように、びくびくしている菊代を、哀れむように元気づけるのであった。——

すっかり日が温まってから、アデリヤは菊代を連れて、店開きのために、新しい仕事場へでかけた。

そこはあまり目立たぬ往来である。そして同じような露路が幾つもある、とある辻の角になっていた。

店へ入れる一切の荷物は昨日のうちに運んである。今日は祝いかたがた手伝いにくる約束の、外人仲間の夫人連や、彩子たちを迎えるための、云わば心祝いのような店びらきであった。森之助の云った、「今日はお前の日……」それが一層アデリヤをたのしませていた。

大きな飾り窓にはブラインドが下され、磨かせたばかりの扉はぴかぴか光っていた。入口のま上に、「アデリヤ婦人帽子店」と、金の横文字で書かれた看板が懸っている。

外套を着たまま、アデリヤは店の前に立って、それらを満足そうに眺め、ケースや飾り棚やを、これからの自分の持ちものとして、親切な気持でいじってみた。そして、やっと外套を脱ぎ、みずいろのブルウズを着て、ちょっと気忙しそうに、帽子を箱から出したり、鳥の羽根を並べたり、卓子の位置を変えたりし始めていると、

「ウラアウラア、おめでとう、」

賑かな声がひと塊りになって、いい匂いをさせながら、毛皮をつけた婦人連がはいってきた。

アデリヤは手伝っている菊代に羽根刷子を渡して、扉ぐちへ飛んでいった。みんな、そのままの位置で、肩を抱えあった小禽のように接吻しあった。

部屋の隅で、じっと、その華かな、無遠慮な声や友情をみせつけられている菊代は、急に光線を当てられたようにうつむいてしまった。こんな風なむきだしの表情が、あたしのふるさとの中にあったかしら。

……嬉しいときにはどんなに嬉しがってもいいのだ、誰に気兼ねすることもいらないのだ、むろんどんな時だっても——菊代はうつむいた眼をあげて、まじまじとアデリヤ達に見とれていた。

ひとりずつの接吻が終ると、花がひとりでに歩きだしたように、いい匂いをそこいらじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ゅうに撒きながら、三人は外套を脱ぎ出した。
「おお、あったかい、いい部屋ね、」
そんなこと云って、出来たての帽子を頭に乗せたりしながら。
花束に添えたお祝の品が卓子にのせられ、アデリヤは微笑を蔵い忘れたようである。
「菊さん、みず、それからお茶、」
花はすぐ飾られたが、四辺いっぱいに取り散らした帽子やリボンは、仲仲かたづきそうもない。
夫人たちは代る代る姿見の前に立って、新しい帽子を一つ一つ冠ってみた。アデリヤも店の飾りつけなぞかまわない風で、
「この羽根はどう？」
茶色の羅紗の胸に、いろを染めた羽毛を、生き花のようにつけてみせるのであった。
お湯が沸いてサンドウイッチの包みがひろげられた頃は、もう衰えやすい冬の日が、部屋の中から出ていってしまった。
そのなかへせかせかと彩子が這入ってきた。……アデリヤは立って、彩子がまだ手套も取らない手を、固く握った。彩子は困ったように赫くなった顔をしかめて、革の手套を脱いでいる、殆ど剝ぎとるような手つきで。
やっと、かたい手套をはずし終えて、三人の婦人たちともめいめい握手しあった。
「旦那さま大丈夫？　赤ちゃんいかが、」
中で一番日本語の達者な、少し、日本ずれがしてるかのようにみえる画描きの夫人が、こう云って彩子を戸惑わせた。
「うん、大丈夫、大丈夫、彩子さん旦那さま、もりのより綺麗……ね！」
アデリヤが代って、あぶなっかしい日本語の会話をはずませていたが、彩子はやはり困ったような顔でいる。それからちょっとの間、夫人達はフランス語を使い出したので、彩子はまるで逃げるように、菊代のそばへ立っていった。
菊代は帽子の空箱を棚に積みあげていた。
「ご苦労さま、まだこれからなの？」
「はあ、どうしてよろしいかわかりませんので、」
彩子はコオトを脱ぎながら、その辺を見まわした。横の入口からは、往来の激しい人群れが眼にはいってくる。みんな何かしら包みをもった、用あり気な歩み。そしてまあ、なんと仰仰しい化粧、目立つ服装をしていることだろう。こんなにお洒落して町を歩かなければならないなんて、本当にまあ……
両の袂を八ツ口に挟んで、彩子が床の上の包み紙や、紐や塵などを片づけ始めると、夫人たちはびっくりしたように椅子を立ってきた。肩高い仏蘭西語で喋りあいながら。
フランスから着いたばかりの各種の材料は、鮮かなレッテルをつけたまま、戸棚の隅へ保存され、出来上った帽子たちは、夜会を思わせるような、思い思いの形で蔵われた。
そして、流行型の帽子が二つの飾り窓に一つずつ、鳥の羽が数本、固いリボンが二巻、まるで特別な標本かなんかのように並べられた。ケースの中にも多くの品物を飾らず、店の中は、ささやかなサロンのように清潔である。
亜麻毛の夫人たちは、始めのうちは彩子を意識しあって、片言まじりの日本語をあぶな気に使いあっていたが、だんだんと自分たちの会話のなかに、日本人がまじっていることを忘れ始めたようである。
それを思い出させるほどの、烈しい光や色を彩子は浴びせようともしないので、こんな場合にも、いつも忘られるままに忘れられ、夫人たちは、べつに今の自分たちには髪の毛ほどの関係はなくとも、「あたしの杏の樹」が、今年は結実が悪くて、幾らもジャムを採れなかったことや、牡蠣が安いという話や、曲馬団の慈善興行には、券を何枚買ったことなぞの、遠い仏蘭西の出来ごとを、現在自分たちが行ってでもいるかのように、身近く語りあっている。そんなことにさえ慰められるほど、彼女たちの殆どが、絶えず故国に焦が

れつづけている。それはいたましいひとつの習癖のようだ。

日本に住むこれらの外国生れの夫人たちは、充分日本住いを好いていながらも、なんとなく不安そうに、絶えず探しものを続けているような、哀しい暮し振りをしている。

それは丁度、菊代が「すみれの貧しい揺籃」を恋うるに似て、ひとは到底追憶の日からのがれることは出来ない。たとえば、それらの日日がどんなひどい運命であっても、その日日から遠ざかったとき、ひとびとは急に、それらの日日を大切にし出す。追憶というものが、おのずからそういう夢をもたせているのである。——

或る季節に催されたアデリヤのお茶の会で、彩子も各国夫人連の渦のなかにまきこまれていた。集まった夫人たちは、イギリス人や、スエーデン人や、アメリカ人や、フランス人たちで、まことに生まなましく故国の癖を出しあっていた。そんなときには、その人びとの背負う国というものが、異郷に身をおくそれらの人びとを俄かに助け出す、そして、平生は無口なひと達さえも、仏蘭西に関する限り、或いは英国に関する限り、自分だけがその専門家ででもあるかのように、振舞わずにはいられなくなるらしいのである。

こういう場合に、これらの人びとの愛する対象というのは、めいめいの「国」以外にはないようである。良人たちの国、日本はまるで彼女たちから、離れた存在である。各国夫人たちの習癖とは、その国柄に染めわけられた単なる偶然にすぎないのに、この幾人かの異国の妻たちは、その生涯を、二つの色にわけ通さなければ暮し得ないのであろうか。ここに、国際結婚の悲哀は尽きている。——

まもなく日は暮れはじめた。

アデリヤ婦人帽子店も、店らしいたたずまいを備え終り、明日からは、化粧した町のなかの人眼にさらされる訳である。

この午後の間じゅう、菊代は部屋の片隅で、裁台の上を拭いたり、フェルトを巻いたり、帽体を揃えたりしているだけで、誰からもかえりみられなかった。

「すみれ」を発つとき以来、内内心のうちで、親しい相談相手にもなって貰えそうに頼っている彩子でさえが、ほんの一言二言声をかけたきりで、毛糸のように暖かそうな夫人たちと一緒になって、少しはしゃいでいるらしくみえた。菊代に用事を云いつけるのもうっかりする位、この日はみんなを明るませていたのかもしれぬ。

「働くということが、こんなに嬉しいしあわせな奥さんたち、」

しかしこの午後は、作らぬ菊代の心を、少し考えこませたようである。

「あたしがあたしであることを、そして、あたしがどんなにか生きてることを……あたしはどうやって、人びとに知らせたらいいのかしら、」

久しい間、カトリックの訓えにたしなまれ、忍ばされてきた菊代の思想は、徐徐にそのまとう視野を脱ごうとし出した。

落日の前のもろい日が、僅かに金の横文字を染めているだけで、町には灯がはいっている。すっかり店を閉め終って、みんなで往来へ出た。

「まあ、かなり遠くからでも、看板が光るわ、」

彩子が振り返ると、みんなも靴の音をとめた。

「とうとう、あたしのお店出来ました、あたし、もう奥さんだけじゃない、帽子屋の主人ですよ……」

アデリヤが笑いにまぎらせてこう云うと、

「だけど、あんまり女主人になりすぎないようにね、だって、あなたのもりのが、奥さんを失ってしまうでしょうから……」

夫人だけでいる夫人たちが、云い返した。

「まあ、みてらっしゃいな、あたしはやり通してみせますとも、」

アデリヤは楯をとる形をしてみせる。

この、倖せというべき筈のアデリヤを、ここまで呼ぶものは、何の故であろう。
靴音にまじったわが足音に、彩子はじっと耳をたてた。あふれ返るような町の中を、その考えごとをしながら歩いていた。

「手套をしてゆこうかなあ、」
外出の身仕度を済ましてくるまの来るのを待つうちに、不意に森之助が云い出した。
「手套？」
アデリヤもやっと気づいたように、服簞笥を開けにいった。順順に抽斗を開けてみた。服飾品がきちんと分類されている用簞笥を、今度は稍稍あわて気味に探し始めた。アデリヤの顔つきが、だんだん焦れったそうになる。カラアの箱を引っくり返したまま、手当り次第の場所をかきまわし出した。それは探すというより、殆ど散らかしていると思えるほどの激しさに変ってきていた。……
「どっか蔵い忘れてるんだろう、」
「そんな筈も……それに、もう時間がないんですよ、おや——坂の下でくるまの音がしてる……でがけに、こういう忙しい気分になるなんて、本当に厭、」
こう云って、アデリヤはあわただしく衣裳鏡の前に駈けよって、立ったままパウダアを刷きなおし、鏡の中にちらっと笑顔を作っている。
「おくるまが参りました、」
アデリヤはゆっくりと手套をはめながら、森之助をうながした。森之助はアデリヤの長い指先が、まるでもがくような恰好で手套のなかに蔵われてゆくのをみやって、ちょっと、意地わるを云ってみたくなる。
「君の手がつめたい季節には、僕んだってつめたいんだからなあ……」
「じゃ町へでて、一つお買いになればいいわ……だけど、あたしの忙しいとき、もりのも忙しいんでしょうかしら、」
低い歌うような仏蘭西語で、ふたりは云いあっているが、顔だけはにこにこしていた。
菊代がアデリヤの背後にまわって、毛皮にブラッシをかけている。そして、おずおずと云い出した。
「あのう、手套はせんだって洗濯やへお出しになりましたようですが、」
「なんだい、それまで忘れてるんだね、」
森之助は菊代の方をみながら日本語で、そしてアデリヤがいぶかし気な顔になりかかっているのを訂正するように、すぐ仏蘭西語に訳した。
「ほんとに……」
アデリヤもおかしそうにわざと溜息して、
「だって、クリスマス、しんねん、お仕事ああ忙しい、あたし、手も心もひとつ、小さな手套のことなんか、忘れちゃいますとも、」
「してみると、仕事というものが、いままでの君を、こんなにそそっかしくするのだからなあ……」
だから僕は、お前をそんなにさせるお前の仕事というものが気に喰わないのさ、幾らお前が気を使ったって、全く魔法でもない限り、そりゃ無理にきまってる、そして余計お前は苦しむ、苦しんでもお前にはたのしい道だ。だけど、お前のその苦しみは僕へのものじゃあない、それだけに僕には、それがお前のわがままとも映るのだ。僕はお前の良人だけでいると云うのに……
そんなことを思っている森之助のお腹を、ちゃんと見透してでもいるように、アデリヤは形のいい唇だけで笑んで、
「もりの、あたしの持った責任のために、あたしが少し位あなたを忘れたって、気にしないで下さらなくっちゃあ……」
とうとう、くるまに乗るまで、ふたりはこんな云いあいをしながら出ていった。——
御主人夫妻を送り出してから、梅やと菊代は夕食を始めた。六畳の女中部屋は明るい、そして鉄瓶は唄を歌いどおしである。
「菊代さん、奥さまったらものずきねえ、趣

味だかなんだかしらないけど、この頃の気むずかしそうなお顔、帽子作りなんて道楽みたいなものにきまっててよ、」
「そんなふうに考えてはわるいわ、だって、ひとはパンのみのために働くものじゃあなくってよ、奥さまのなさってることが、ただのたのしみだけのものであっても、たのしみを作らないひとよりいいじゃあないの？」
「じゃあ、なんでもするものの方が得ね、」
「ええ、しないでいるよりは甲斐があるわ、」
「菊代さんも、姿に似合わず太いとこがあるのね、」
「……」
「あら、怒ったの？」
「あんたにそう云われて、あたし、自分のそんなところに気がついたの、あたしの夢は、それが夢だけで終ってはならない夢なの、あんたみたいに、田舎に父さん母さんのあるひととは違うんですもの、」
「あんたのお父さんて、どこの国のひと？」
「そんなこと知らないわ、知ってるのはあたしが混血児だっていうことだけ……」
「すみれの話きかせてよ、」
「すみれに育ったもの以外には、わからない場所よあそこは……話してもつまらないわ、」
「そうそう、お部屋が散らかし放しだったわね、奥さまったら……」

梅やは、概してアデリヤ夫人のこの頃に、好感をもっていないようである。一日の家庭内の仕事は、殆ど梅やの肩にかかり、その上、今までの華やかなお客様たちはみんなお店へいってしまい、家庭内は灯を暗くしたかのように、急に地味になってしまった。従って梅やへの心づけや半衿なども品切れになり、来る日も来る日も、単調に留守番をしなければならなかった。だいたい梅やの希望というのは、門構えの家をもって、紅茶茶碗や籐椅子のある、日当りのいい生活をもちたいというのであったから、アデリヤが、折角の奥さま業をおろそかにするようにみえるのは、不満なのである。
「あたしは奥さまをえらいと思うわ、お気らくなお暮しに溺れていらっしゃらないだけでも、」
「それが菊代さんの夢なの？　あんた、西洋人をしらないからなのよ、うちの奥さまは、要するに結構すぎて退屈だったからなのよ、」
　菊代は、自分よりかしあわせな境涯をもち、女学校さえ出たという梅やが、女のする仕事について、徹頭徹尾反対らしい心でいるのが不思議で仕様がない。現に働いているアマという仕事が、女である自分のしている仕事だとは、てんで自覚していないようである。

「じゃ、梅さんはお嫁にゆけば、それでいいと思ってて？」
「そりゃあ、その方がよさそうだわ、」
「あたしは……厭あよ、」
　びっくりした顔つきで、梅やが編棒をとめた。菊代は遠い眼眸で、
「あたしは自分で生きなければ厭だわ、」
「なにいってるんですよ、あんたは生きてるじゃあないの、」
　取りあわない風で、梅やは毛糸の目数を数え出した。
「だって、ひとに生かされてばかりきたんですもの、今まで――」
　そう云っている菊代の眼のなかに、クリスマス近い、すみれ孤児院の冬の夜が髣髴としてきた。
　……慈善会から寄附された、着古したジャケット、襞のなくなったスカアト、継ぎのある美しい肩掛、古びたクリスマスデコレエション。それらを、丹念に選りわけて作られる孤児たちへの贈物を、一年の間待ちわびている、あのみなぎるような哀しさを……
　遠い場所にたぐり寄せられてでもゆくように、菊代の眼眸はだんだん厳しくなった。

「いまはあなたの冬ごもり期でしたね、さい

わい仕事は忙しすぎるくらいで、原、高木両夫人が手伝って下さることになりました、菊代さんは仲仲賢く、あたしのたのしい白生地です、アデリヤよりマダム海辺に、」

クリスマス以来、籠居して誰とも会わずにいる彩子へ、或る日絵葉書がきた。丁度編物をしていた彩子は、退屈しきった頭に、アデリヤの便りが香水のように浸みた。読み終って展けた気持にみたされながら、なんべんも読み返した、その気持を愉しむために。

菊代をすみれ孤児院から連れてきたことについては、彩子自身無関係ながら、どことなく責任めいたものを感じてもいたので、菊代がアデリヤの気にいっているらしいのは、まずほっとする気持である。混血児という菊代のもつ運命が、四人の混血児の姪たちをもつ彩子には、よけい気がかりな、そしてまた親しさの媒ちをしているのかもしれぬ。

ま冬には珍しく風のない静かな日で、今日は、この町から一里ほどさきにある御用邸へ、内親王さま方がお見えになるというので、往来すじのどの家にも、国旗がひらめいている。

御紋章のついた宮内省の運搬自動車が、午前中に通った。

こうして一年のうち、幾度かの御用邸へのお成りで、彩子は、小さな宮さまたちの立派な御成長ぶりを、その度に垣間見ることが出来た。

アデリヤたちから「赤ちゃん」と呼ばれている子供も四つの春を迎えて、

「みやさまの赤い自動車」を覚えるようになり、いつも彩子に抱かれて、赤くぴかぴかに光った自動車をお迎えする。

却って、東京住いのアデリヤやドロシイたちは、まだ一度もこの赤い自動車に出会わず、丁度、なかの内親王さまと同じ年生れのマリイをもつドロシイは、或るとき、こんな風に話しあうのである。

「日本の宮さまお綺麗ね、あたし、お写真だけ、美しい髪ねそしてたくさんに、こんど、彩子さんのところで、いっしょにどうぞね、子供たちは宮さまが大好きなんですよ、」

ドロシイは少女のとき、或る催しの皇帝陛下御微行のさいに、皇帝みずから無造作に、その多くの少女たちの髪を撫ぜられたという誇らかな記念をもっていて、今でも、その四人の子供たちに、故国の皇帝陛下の趣味や、宮廷の日常などを、本やニュウスや、或いは国からの私信によって、自分の知り得る限り詳しく語りきかせていた。

そのために、次次に日本で生れた子供たちも、常にみしらぬ皇帝陛下を敬慕していて、陛下のおかくれを知ったときは、みんな喪のなかに沈んで、ドロシイの悲しみをいっしょに感じていたようである。

今年の陛下の御誕生日には、皇女さま方のリボンはみずいろだったとか、服の刺繍はどんなだったとか、英国に在る肉親や友人からの便りで詳しく知っている。そして自分の子供たちの色も、そういうなかから選ぶことが多い。――全くドロシイの、その稚い頃の記念をいとおしみ大切がることと云ったら……

そんなことを思い出したので、彩子はこの暖かい日のなかに、宮さまお揃いのお成りを、ドロシイやアデリヤに急報したいような気がした。

まもなく、彩子は、こういう場合いつもするようにして、家の前に立った警官の脇で、光った自動車を奉迎した。

お通りのあと、沿道からはいつになく人びとがかたまって歩き出し、乗合自動車や荷車が、急にせかせかと動きだす。……そんな、いつもながらの何かほどけてゆくような、ゆるやかな風景をぼんやり見ていると、彩子は、どうしてもいっぺんこの平和な美しい光景をアデリヤたちに見せて、彼女たちの古い思慕を、新しく日本の土へ蒔く助けをしたく思う。彼女たちの故郷のもつ、どんな美しさや強さや平和にも負けぬこの国の日常を、適当に抽き出して、その最も印象的な方法で識

らしめねばならない。

たとえば、人間はその受けた悲しみを、永く覚えていて悲しもうとしても、ひとりでにその悲しみからいつの間にか逃れていってしまうように、その苦しみのなかに永く留まることは出来ない。しかし――たのしさは、忘れようとしても、仲仲ひとから剝がれてはゆかぬ。年月が古びるほど、そのたのしさも、水底の宝石のように輝き出すのだ。……そんなような状態を、彼女たちは故国へのあこがれの中に保っている。

彼女たちのもつ、水の底の宝石めいたふるさとを失くさせるためには、それ以上の宝石を、たしかに手につかまさなくては、あの合理的な保守的な、そして減ることの大嫌いな彼女たちを、うなずかせるわけにはゆかぬ。そして、そうしようと思えば、彼女たちに与える新しい宝石は、彩子たちの周囲にざらざらしている。その良人たちは、余りにも多い宝石のために、彼女たちに、それを与える気さえ失ってしまっている。そして、もう、それらを宝石とは思わなくなってしまっているようだ。

「あたしは、たった一つでもいい、ドロシイやアデリヤに、日本の宝石を与える助けとなろう、」

彩子は、この頃、だんだんそうしたことに自分を考えるようになった。

十三の春に、義姉としてはるばるロンドンから迎えたドロシイ、そして十九の秋、既に姉嫁としてのアデリヤを、同じ家系のなかにみいだしている、その自分のもたされた乗合馬車にも似た運命を、ただ、平気で見過すことは出来なくなった。

そういう、異国の人びとを姉としての立場におかなければならないような、意識せぬ自然なめぐりあわせを自分が感じているように、この異国の姉たちも、感じているであろうその不思議なつながりを、もっと深く考えてみたい。おたがいに、一つ運命の環のなかで、還元されながら暮しあわねばならぬ、こうした自分たちだけが味わう、さまざまの不便や不調和を、怖れるだけでなく、作り変えてゆかねばならないようだ。

「それが、あたしに出来るのだったら……」

この意識は、年年、彩子に久しい。

それでむしろ、アデリヤが郷愁と戦っているより、ひとりの帽子作りとして、自分の家庭と戦っていてくれる姿の方が、どれほど身近い問題であろう。そのためには、

「森之助さんも、家庭のアデリヤが死んでしまうことさえ我慢してもらえないだろうかしら、」

彩子はこうも思うほどだ。

そして新しく、そういうアデリヤ家へ登場した菊代の姿や、丁度同じ年頃の、しかしずっと丈夫な境遇に生きているマリアンヌを、思うともなく比べ出した。

いつの日にか、どういう結婚のしかたをするのであろうか。日本に住いながら、ドロシイの趣味というよりその信念のために、日本的な教養を少しも身につけていないマリアンヌは、どういう相手を選ぶであろう。

母親たちによって描かれたむなしい故国よりも、成長した今の少女たちの眼でつかむこの国をこそ、彼女たちの新鮮な芽とするよう助力したいものだ。――だんだんと彩子は、この混血のふたりの少女に、自分の望みさえかけて興味をおぼえるのだ。

「そうそう、もっとあたしは度度彼女たちと会わなければならない、都合のいいことには、あたしが彼女たちにとって、お友達と同じ位に若いおばであるからには、もっとこの力を利用して……」

そう思うと、自分のしらない、いろいろな彼女たちのきらきらした叫びや嘆きから、全く遠ざかっている静かな暮しが内省される。なんだかそう思いだすときりがない位、彩子は胸いっぱいにものを案じ出した。

こうやってものを案じさせる動機となった、たった一枚のアデリヤの端書をまた読み

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com